

◇ 広 地 紀 彰 君

○議長（山本浩平君） 引き続きまして、4番、広地紀彰議員、登壇を願います。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 議席番号4番、広地紀彰です。通告に基づき、2項目にわたって質問いたします。

まず、1項目め、民族共生象徴空間開設を控えたまちづくりについて、町長に対し、1点目、第5次総合計画とまち・ひと・しごと創生総合戦略の主要施策や重点プロジェクトの成果と課題を伺います。

2点目、アイヌ文化振興と多文化共生のまちづくりの具現化の進展を伺います。

3点目、白老町の活力創造に向けた考え、取り組んできた施策の現状と展望を伺います。

○議長（山本浩平君） 戸田町長。

〔町長 戸田安彦君登壇〕

○町長（戸田安彦君） 民族共生象徴空間開設を控えたまちづくりについてのご質問であります。

1項目めの第5次総合計画とまち・ひと・しごと創生総合戦略における主要施策等の成果と課題についてであります。民族共生象徴空間ウポポイ開設を契機としたまちづくりの上位概念として多文化共生のまちづくりを掲げ、第5次総合計画とまち・ひと・しごと創生総合戦略の整合性を図りながら産業振興や移住定住対策など地方創生の推進に向けて取り組んできたところであります。その重要業績評価指標の達成については、毎年成果を積み重ねているところでございます。しかしながら、近年の急速な人口減少と少子高齢化を背景とし、当初設定した人口目標と現時点における実質値に大きな乖離が見られ、依然として厳しい状況にあるものと捉えております。現在、第5次総合計画及びまち・ひと・しごと創生総合戦略とともに次期計画の策定に向けて取り組んでおりますが、これまでの評価、検証の過程の中で明確化した課題等を的確に捉え、今後のまちづくりに必要な施策等を盛り込み、さらなる地方創生の推進を図ってまいりたいと考えております。

2項目めのアイヌ文化振興と多文化共生のまちづくりの具現化の進展についてであります。暮らし、産業、文化の3つの共生の視点による、多文化共生のまちづくりが進む中、産業の共生においては町内のアイヌ工芸グループ等によるアイヌ文様を施した手工芸品、さらにアイヌの伝統を受け継いだ商品開発の取り組みなど、アイヌ文化等を生かした産業化の動きが活発化しております。今後においても、アイヌ文化の一層の振興と、多文化共生のまちづくりの具現化を進展させるために多くの町民の皆様が多様な価値観を理解、尊重し、主体的に取り組むことができるよう各種事業を通して、その機運醸成と普及啓発に努めてまいります。

3項目めのまちの活力創造に向けた施策の現状と展望についてであります。これまでまちの活力創造に向けて、稼ぐ力を醸成するため、象徴空間周辺整備や回遊性を高める施策等

に取り組んでまいりました。また、活力創造には、地域の活性化が必須であることから、地域コミュニティの再生を促進させるため、がんばる地域コミュニティ応援事業を実施し、町内会や地区連合会等が主体的に行う個性豊かな魅力ある地域づくりについて支援を行ってまいりました。今後の展望としましては、ウポポイを初め町内のすぐれた資源を生かし、地域産業の強化や関係人口の創出を図りながら、地方創生を推進させるとともに、がんばる地域コミュニティ応援事業など、地域の活力創造に向けた取り組みをさらに推進させ、まち全体の活力創造に波及させていきたいと考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。思えば8年前ですが、私が登別市から白老町民に転居をしてわずか1年で白老町を変えようという言葉に胸を熱くして、無謀とも言える町議会への初挑戦を遂げ、また2期目を超え、今8年を終えようとしています。この間絶対この案で通したいので話を聞いてくださいと熱く私をつかまえて資料で政策の提案をしてくれた職員がいたり、また立場が違っても熱く議論し合った議員各位と重ねてきたこの8年を今振り返り、一つの物語として今の私の中にも生きています。町議会議員としてのまとめとして思いを込めて今回質問してまいりたいと思います。よろしくをお願いします。

象徴空間開設を控えた1項目めのまちづくりについては、総合計画、実施計画及び重要業績評価指標が数値化されて検証が容易である、またさらに第2期をこれから控えるまち・ひと・しごと創生総合戦略を中心に質問してまいります。ではまず、1点目、第5次総合計画の重点施策、総合戦略の成果と課題について先ほど町長からご答弁をいただきました。具体を少し尋ねていきますが、柱1、象徴空間を中心とした多文化共生のふるさとづくりについて伺います。象徴空間の整備に伴い経済的、社会的活性化の実現が期待できると考える町民の割合80%を目指していると捉えておりますが、その現状の到達点を伺います。

○議長（山本浩平君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 柱1、象徴空間を中心とした多文化共生のまちづくりの達成度についてのご質問でございます。

先月になりますが、平成30年度版の有識者会議を開かさせていただきました。そこで有識者会議の中で評価をいただいたところでございます。到達率としましては67.68ということでございます。昨年度が60.65ということで、若干ではございますが、到達率は上がっているものというような捉えでございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番です。さらに到達80%を目指して努力を重ねられると思いますが、この向上の具体策について。

○議長（山本浩平君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君）　まずは、今回こちらの象徴空間を中心とした多文化共生のふるさとづくりの今までの取り組みを少しお話しさせていただければと思います。

こちらの項目につきましては、民族共生象徴空間の開設に向けた雇用の創出、拡大、象徴空間周辺の整備促進並びに活性化、情報発信のほか、アイヌの精神や文化、多文化共生の理解普及につながる取り組みを行ってきたものでございます。具体的には特に30年度につきましては空き店舗を活用した創業支援や新商品の開発に対する支援、それからプロモーション活動としましてウポポイロゴマークを発表した象徴空間500日前カウントダウンセレモニーの開催や、これは北海道と一緒に行ってございますが、仙台市や沖縄市といった道外の大都市圏におけるプロモーションの活動の実施などを含め、周辺整備についてもバリアフリー化も兼ねた白老駅跨線橋の工事の着手や駅北観光商業ゾーンの実施設計の実施などさまざまな取り組みを行ってきたところでございます。また、児童生徒に対するアイヌ文化の学習や地域学講座の開講等も積極的に取り組んでおりまして、アイヌの精神、文化の理解促進が少しずつ図られてきたところでございます。

○議長（山本浩平君）　4番、広地紀彰議員。

〔4番　広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君）　4番です。アイヌ文化振興の観点も重ねながら事業に取り組まれている様子については理解できました。

これ九州の国立博物館開館による地域経済への波及効果測定分析という資料、私の手元にあるのですが、喚起の一つの方策としてやはりこういった地域経済にもたらす効果の測定や、あと推計が必要になってくる時期ではないかと考えます。実際本年2月13日に開催された議員会主催による今井太志アイヌ民族文化財団専務理事兼事務局長の講演をいただき、またこれが報道機関各位によって報道された後に何うと不動産会社に一気にアパートの用地の問い合わせがふえたと。これは事実です。参議院事務局企画調査室調査情報担当室の筒井隆志氏による「文化・芸術による地域活性化」、また「文化・芸術の持つ可能性」というレポートが私の手元にもあるのですが、これには具体的な文化や芸術がもたらす効果の測定方法が書かれていました。北海道や国の関係機関を通したり、また金融関係のシンクタンクに相談するなど町がみずから行うだけでなく、さまざまな関係機関とも連携を図りながら専門的知見を活用し、町民にもわかりやすい形で伝えるとともに、町内事業者の意欲の喚起、また町民の期待の向上を図るべきではないかと考えますが、いかがですか。

○議長（山本浩平君）　工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君）　経済の地域の活性化を測定するような取り組みといたしますか、そういったものが需要ではないかというご質問であろうかと思えます。

まち・ひと・しごと創生総合戦略の中では、それぞれ基本目標ですとかK P I を掲げさせていただいております。議員のおっしゃられる測定という部分には該当しない部分もある

うかと思いますが、基本目標の中では象徴空間の整備に伴って新規雇用者の目標数を持つたりですとか、それに伴う定住移住者数がどれくらいになるのかとか、経済的・社会生活の実現が期待できると考える町民の割合ですとか、そういった直接的な金額的な部分の経済効果の部分の指標としてはまち・ひと・しごと創生総合戦略の中ではうたってごさいませんが、そういった指標の中で実現ができていないかということを図るような指標を掲げて取り組みをさせていただいているというような状況でございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 推計という点については、非常に難しい部分があるのは私も十分に承知をしています。ただ、これからもう半年余りと迫った開館があり、あとそれから一定の年数を置いた後にこの象徴空間が私たちのまちに何をもちこたせているのかといった部分をしっかりとやっぱり検証していく姿勢は求められると考えます。実際今の太宰府市がまとめられた形は基本的にはアンケート調査をもとにしていますが、あと地域小売店に対しての調査と。実際これ国のほうでもこの資料を参照しているような、ある程度努力されている様子がかいま見える測定調査にはなっていますが、こういったような効果がなされたのかといった部分はやっぱりしっかりと押さえていくことがまちづくりにつながると考えますので、そういった事後における経済やその他さまざまな効果の検証についての考えを伺います。

○議長（山本浩平君） 藤澤経済振興課長。

○経済振興課長（藤澤文一君） ウポポイ開設に伴っての経済波及効果といったようなご質問でございます。

昨年度も地方創生推進交付金事業の中で観光消費額調査というものも行わせていただいておりますが、ではウポポイ開設後がこういった傾向を示すかというところでいいますと、北海道庁において一定限の観光消費に対する予測を出すための計算シートといいますか、そういったものも作成されておりますので、今後はそういったものも活用しながら試算もしていきたいと考えてございます。

○議長（山本浩平君） 三宮アイヌ総合政策課長。

○アイヌ総合政策課長（三宮賢豊君） 経済効果の部分で実際今ウポポイ建設をしております、その現場に係る請負業者が多数ありまして、その辺の関係につきましては今国のほうから請け負った業者のリストなんかもお借りしながらどういう方法で経済的な効果があったかとかということとはちょっと調べていきたいなというところは考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。今総合戦略に係ってオール白老交流体制の確立にかかわり、ウポポイ来場者100万人達成及び交流人口を合計した300万人達成に向けた観光

入り込み客数の実態はどうなっていますか。

○議長（山本浩平君） 藤澤経済振興課長。

○経済振興課長（藤澤文一君） ただいまご質問にあったとおり、ウポポイに関しましては100万人の来場者、それに伴って町内全体の観光客の入り込み客数としてはK P Iの目標値としても300万人を想定しているということでございます。そういった中で現状、直近でございしますが、平成30年度におきましては観光入り込み客数については約150万5,400人といったような状況の中で、前年度と比較しても約20万人落ち込んでいるといった状況となっております。この大きな要因といたしましては、旧アイヌ民族博物館が閉館したことによる減少と捉えておりますが、ウポポイ開設後においてはこの目標値に向かって努力をしてみたいと考えてございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。実際に今閉館等もありまして、これから開設を控えて、K P Iの目標達成に向けてさらに努力を重ねられるのかなと理解していますが、この向上のため目標達成に向けた取り組みの一つとして、30年度の評価検証においては誘客ツールや情報発信、あとは積極的なプロモーションといった攻めの誘客という捉えをして総括しています。また、29年度においては道外に対してのP Rがやはり必要だということだとか、国、官民の連携や、あとは各種イベントの開催を展開していくといったようなことが記載されておりました。今後開設を控え、また開設後も国や北海道など関係機関連携との対応はさらに増していくのかなと。その点については理解できます。しかし、一方で私は白老町ができるP Rを追求すべきだと訴えてきました。平成29年度には、これは町役場としても押さえておりましたが、意識啓発事業として商工会女性部が発案されたアイヌ文様が入っているネクストラップの着用は生産が追いつかないほどでしたし、あと町職員の発案によって象徴空間P R用の2020年誕生と、きのう水曜日でしたから、職員の方が着用されていましたが、ポロシャツの作成など、こういった民間や行政の若手職員の自主的な活動は本当に目を見張るものがあると思います。大いに喚起すべきだと思っています。主幹や若手の意見が具現化できる場、自由に議論できる場、発案の具現化ができる、そういった場の創造が必要ではないかと考えますが、いかがでしょうか。

○議長（山本浩平君） 三宮アイヌ総合政策課長。

○アイヌ総合政策課長（三宮賢豊君） ウポポイのP Rの部分の関係ですけれども、実際今年度アイヌの新型の交付金事業ですね、もしつけばということですが、その中でもP R事業としまして全部合わせて2,000万円ぐらいを今回補正でも要求させていただいていますけれども、その中でやはり白老町の方が参加して盛り上がるようなものと考えております。今までちょっと外からいろいろ人をお呼びして、皆さんで見させていただいてというものが多かったのですが、少し町民も町外の方も皆さん参加して、白老町のことを情報発信してい

ただけるようなPRであるとか、あとその辺のPR事業につきましては若い職員の意見なんかも聞きながらもう少し詰めて、皆さんが楽しめるような、楽しんで盛り上がるようなイベントなんかを考えていきたいと思えます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。ポロシャツは2020年誕生とあって、デザインが大変好評でした。これも職員が考えられたということで、次のウポポイやPRのキャラクターも生まれてきていますし、第2弾はないのかなと町民の一人としても期待しているところなのですけれども、また先般の報道で萩野小学校の6年生が函館でPRしていた記事を見つけて、本当にうれしくなりました。やっぱりこうした地道な取り組みがこれからSNSも広がった中で間違いなく実を上げていくのではないかと大いに期待するものです。

いま一つの提起は、現在の白老町が持つ人脈の活用です。これも常日ごろから訴えさせていただきましたが、白老町はニュージーランドやハワイ、台湾や世界中の先住民族の方たちにアイヌの方々を通しさまざまな人脈を持っています。あと、さらに今一定の成果をおさめつつあるふるさと納税の返礼品にも大いにPR物を同梱していく必要があると思えます。こうした既存の人脈や既存の事業を生かして白老にご縁を持つ方々に2020年、ぜひ来てほしいと、再び始まる交流の扉を既存の関係性を生かして事業化していくべきだと考えますが、いかがですか。

○議長（山本浩平君） 岡村副町長。

○副町長（岡村幸男君） 今のお話、本当にそうだなと思えます。我々も知恵を出して、今ある既存の資源というか、これまで培ってきたものの中でいかにそういうPR活動ができるかということがやはり本当に大事になってくるのだらうなと思えます。これから新たなものを創造しながらPRをどうしたらいいかという、そういう部分をやはりどうしても考えていく、そういうことも必要にはなっているのですが、今議員が言われましたふるさと納税の中にそういうパンフレットを入れ込むですとか、そういうことも十分検討しながら国内にPRする方法、それから世界にPRする方法がどんなことが可能なのかと。今のネット社会の中では世界にPRする方法も必ずあるのではないかなと思えますし、そういうことを含めて十分検討していきたいなと思えます。

○議長（山本浩平君） 藤澤経済振興課長。

○経済振興課長（藤澤文一君） いろいろな人脈を通じたPRの方法といったようなことでございますけれども、先ほど議員のほうからお話があったとおり萩野小学校の6年生が修学旅行で函館市でPRをしてきたといったようなことを考えますと、やはり町民全体がウポポイのセールスマンになって、町内外に発信していくといったようなことも大切なことかなと考えておりますし、一方ではウポポイの認知度のアップというところでいいますと、道外プロモーション、これは昨年度から都市部において行っておりますが、一例を申し上げ

ますと去年行った沖縄県でのプロモーションでは白老の観光大使と町長がトークセッションをしたりですとか、そういった観光大使に活躍していただく場面というものも今後出てくると思いますし、あと開設を見据えたPRアンバサダーにも当然ながら道外のプロモーションには参加いただいているといったようなところもございます。

それと、もう一つ、教育旅行の誘致の関係でございますが、この部分は北海道の観光推進機構様のほうも道外において修学旅行の誘致活動、こういったものにも力を入れていただいているという実態もございますので、いろんな組織ですとか人脈を通じて今後もPR活動につなげていきたいと考えてございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。総合戦略の中の重点プロジェクトとして位置づけられている白老版DMOによる多文化共生のまちづくりプロジェクトにあるアイヌ文化など地域資源を活用して起業する件数が目標5件に対して、実績はどのようになっているのかお尋ねします。

○議長（山本浩平君） 藤澤経済振興課長。

○経済振興課長（藤澤文一君） 新規の起業件数ということでございます。30年度におきましては実績としては3件、これは創業支援の助成金を活用した件数ということで3件と押さえております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 関連があるので、重ねて質問するのですが、柱3、特色ある産業、地域資源を活用した仕事づくりの重点プロジェクトであるしらおい「オンリーワン産業力強化」プロジェクトについて伺いますが、地域資源の活用により企業創出を行うとしています。町長も4年前に公約で空き店舗利活用を通じた地場産品、芸術、文化などの深化を公約にも掲げて4年間事業に取り組みましたと承知していますが、このあたりの目標の達成度、具体的な事業展開についてどのように押さえているのかどうか伺います。

○議長（山本浩平君） 藤澤経済振興課長。

○経済振興課長（藤澤文一君） 空き店舗の利活用の件でございます。平成27年度から空き店舗の開業に当たっての助成制度を創設して行ってまいりましたが、平成27年度から平成30年度までの利用件数につきましては13件と押さえております。今年度につきましては、100万円掛ける6件分の予算を持っておりますけれども、現状においては4件採択されているといったような状況でございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 虎杖浜にDHCという健康食品、健康の補助食品、あと化粧品など

製造されている大手の企業の工場長としてお勤めになっていた方が在住しておられます。伺うと、白老牛の胎盤をもとに抽出した成分が最高の成分がとれたと。試作した化粧品が愛知県のほうに販売をされたら、試作ですから、あっという間に売れてしまって、虎杖浜にゼビ工房をつくりたいということで今つくっている最中です。この方の縁でまた別の企業が町内にさらなる施設を建設したいということで、不動産も取得をしているという企業もあるそうです。白老牛の胎盤は、今伺うと産業廃棄物業者にお金を払って何か処分してもらっているような状況であり、これは違う角度からいった地域資源の活用につながっていると考えます。ですので、空き店舗の活用やアイヌ文化とさまざまな地域資源を活用した実績と今後について答弁いただきましたが、こういったさまざまな動きが見られます。このまちにとって起業をさらに高めていくための今後の方策についての考えを伺います。

○議長（山本浩平君） 白杵経済振興課参事。

○経済振興課参事（白杵 誠君） 今後の起業を促進するための方策ということでございますけれども、まず今現状である空き店舗創業対策の補助金につきましては、ウポポイ開設を見据えた創業の促進と集客力の向上、リピーターの拡大といったような地域経済の活性化を図ることを目的としたものでございますので、来年のウポポイの開設に当たりまして本事業自体は一旦区切りということにはなりますが、ウポポイ開設後においても創業の機運が高まると考えられることから、町としては現在作業中なのですが、今年度中をもとに産業競争力強化法に基づく創業支援等事業計画というものを策定する予定で今まさに動いております。そのことによって国からのさまざまな支援が受けられることとなりますので、そういったことを活用しながら創業支援の取り組みのさらなる充実ということを図ってまいりたいと考えております。

○議長（山本浩平君） 富川農林水産課長、ありますか。

どうぞ。

○農林水産課長（富川英孝君） 済みません。白老牛の胎盤を活用して化粧品というのは我々はちょっと承知しておりませんで、大変申しわけございません。ただ、白老牛の、うちの農業といたしましてはやはり畜産が中心ということで白老牛、排せつ物といったものの処理をどうするかという部分がございます。そういった中では、近年町内において耕種栽培と、そういったものが増加している中であっては、域内で排せつ物を堆肥として活用するというような有機的な耕畜連携というような形での新たな地域内の産業を底上げするような取り組みが生まれていると、そういったことも今後の展開に向けては一つのキーワードになるのかなと捉えているところでございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。情報公開もしながら産業の企業の活力創出について議論できてきているのかなと。

こういった情報を得て、またこういった情報を踏まえつつ役場の政策立案機能を発揮するためにもこれ1つだけつけ加えさせていただきたいことは、私は職員が現場に出る機会の保障と何より汗をかいている職員への特に上司からの温かな理解、まなざしが必要だと考えます。私は、先般行われました虎杖浜かに・たらこ・温泉三大まつりの運動を支援する立場ですが、実行委員会からの誘いに応えたのか、役場の職員の皆様が何人も炎天下、土日にもかかわらず汗を流していらっしゃいました。この関係性の中で事業や政策づくりに必要な生きた情報、また人脈を獲得している姿に私は共感を覚えました。さらに、この汗が地域の方々から評価されて、逆に地域が政策に協力していく協働が生まれる素地になると考えます。ぜひ今後とも政策立案機能発揮のために職員が地域に出向く、その頑張りを評価できる声かけ配慮が必要ではないかと思いますが、いかがでしょうか。

○議長（山本浩平君） 岡村副町長。

○副町長（岡村幸男君） 私もお祭りのほうには顔を出させていただきましたけれども、本当に暑い中で職員がお手伝いをさせていただいていました。私のほうには具体的にこういう形で出るという報告は実はなかったのですが、現場行きましたらそうやって頑張っている職員に会いまして、本当に私のほうからもありがとうという声かけはさせていただきましたが、本当に職員、そういう意味では前向きに自発的に頑張っております。そういう職員には終わった後ですけれども、私のほうからも職場のほうに顔を出しながらきのうどうもありがとうねという、そういう声かけをしながら引き続いて職員に、土曜、日曜は休みになりますけれども、そういう取り組みについては前向きに地域のためになることであれば努力をしてもらえよう環境を私たちもつくっていかねばならないのかなと思っております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。2点目、アイヌ文化振興、共生のまちづくりの具現化の進展を伺いますが、総合戦略柱1にあるグローバルに活躍できる人材の育成について伺いますが、アイヌ文化、精神文化の理解促進のためのまるごと白老学（地元学検定）とふるさと創生総合戦略にも記載されていますが、そういったことの関係で何か事業の構築、検討は進んでいるのでしょうか。

○議長（山本浩平君） 武永生涯学習課参事。

○生涯学習課参事（武永 真君） 教育委員会生涯学習課のほうでは、平成28年から館長とまち歩き講座ということで事業を展開しております。今まで3年間で42の講座を行いまして、延べ623名の出席者を得たということでございます。この方々については、来年度に開設しますウポポイにかかわりますところの仙台陣屋資料館でのガイドというようなことで養成をしているということでもあります。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。今回の、2項目めにもかかわるのですが、一般質問のテーマにもなりますが、私は単に数にとらわれないまちづくりの追求が必要ではないかと考えるものです。この白老学も単に生涯学習の教科の一つとして捉えてはいません。白老学認定できる講師の育成によって生まれる町民への生きがいの醸成、また認定者となった方たちの喜びの歓喜、そしてふるさと納税されていらっしゃる皆様とともにここに住んでいなくても白老町を愛する白老応援団としての今後のつながりの創造ができるなど大きく人口にとらわれない白老人の創造が必要ではないかと訴えます。町民は当然白老町内に現住している方々ですが、白老町を愛する方は町外にもたくさんいます。東京白老会など好例ですが、ふるさと白老町を旅立った方も白老町にかかわったことがある方も白老町、あそこはいいまちだよねと言ってくれる人たちにたくさん私は触れてきました。こうした白老町を愛する人たちをより白老町を深く知ることによって、こうした取り組みによって作り出していけると考えます。今みんなの手によるふるさとづくりの推進として仙台陣屋の環境整備やアイヌ文化の学習機会等を通じた人材育成に取り組みされていると思いますが、その第一歩として私はかねてより仙台陣屋友の会の皆さんやこの白老町の魅力を町外に広めるために活躍された方たちなどを何らかの形で評価し、敬意をあらわす機会をつくるべきではないかと考えておりますが、そういった敬意をあらわす場をつくるとともに、ますますのご活躍を祈念すべきではないかと考えますが、見解を伺います。

○議長（山本浩平君） 武永生涯学習課参事。

○生涯学習課参事（武永 真君） ただいま議員がおっしゃいました友の会につきましては、現在7名ということで、開館以来最高で9名だったのですけれども、若干そのような状態が続いております。また、高齢化も進んでいるものですので、こういう方々にいつまでもというわけにもいきませんので、そういう意味も持ちましてガイドの養成というものを4年前から行い、来年に向けてというようなスタイルで今進んでいるところであります。友の会につきましても本当に単なる資料館の解説ということだけではなくて、まち全体をPRする、そういうようなツールにもなっておりますし、非常にさまざまな事業にもかかわりながら我々とともに進んでいらっしゃると思いますので、今後ともお互いに連携をとりながらやってまいりたいと思っております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。前の議会の中でも長崎さるくのボランティアガイドの方たちのお話を紹介させていただきましたが、退職した方が念願のボランティアガイドとなったと私たちに付き添っていただきましたガイドの方はおっしゃっていました。実際退職されてから好んで白老町に移住をされてきた方たちがいますが、その方たちの中には現状今登別市まで出向いてボランティアガイドをされている方もいます。今ボランティ

アガイド30人という目標を総合戦略で掲げておられるかと思いますが、このボランティアガイドの現状と、そして育成拡大の今後についてどのようにお考えか伺います。

○議長（山本浩平君） 武永生涯学習課参事。

○生涯学習課参事（武永 真君） 現在我々のほうではまち歩きを通じましてさまざまなガイドになるためにどうすればいいのかというようなことをやっておりますし、これからも力を入れながらやっていくところです。ただいまのところ10人から15人程度の方々が来年度に向けてガイドにぜひなりたいというようなことをおっしゃっていただいております。ただ、ガイド活動に対する不安感ですとか、あるいは少しちゅうちょするような動きが見えますので、その辺についてはこの半年間かけながら、例えばガイド教本ですとか進行原稿、モデルコース、そのようなものもつくりながら一緒に自信を持って進めるようなものを考えてまいりたいと思っております。

○議長（山本浩平君） ありますか。

4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。こういったボランティアの育成や白老町に対しての愛情を育むためにも象徴空間の町民の無料もしくは低廉な利用促進が欠かせません。行政報告により7月5日にも官房長官及び文化庁要望なされたとの報告を受けていますが、改めてこの無償もしくは低廉利用促進に対する要望の意気込みを伺いたいと思います。

○議長（山本浩平君） 岡村副町長。

○副町長（岡村幸男君） 町長のほうで町民の方々がやはりウポポイへ入る際の利用料金を無償か、もしくはできれば値段を下げただけでないかという、そういうことの要請活動をさせていただいております。このことに対しましては、引き続きそういう要請をさせていただきながら実現できるように努力していきたいと考えます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。それでは、3点目、白老町の活力創造に向けた考えや施策の現状、展望を伺います。

まず、地域おこし協力隊の活動について伺います。現状における地域おこし協力隊の人数と活動状況や成果をどのように押さえているのかどうか伺います。

○議長（山本浩平君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 地域おこし協力隊の今現在の状況でございます。5名の方が今現在活動されているというようなことでございます。

隊員それぞれさまざまな取り組みをされているところでございますが、観光の部分におきましては新商品の開発やその他民泊もやられたりとか、それから1人の方は旅館を運営されたりですとか、さまざまな取り組みを行っていただいております、各方面でご活躍を

いただいているような中身でございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。30年度の総合戦略の評価検証の中の数字の記載には担い手の発掘強化として30年度実績は9名の採用となっていますが、これは数字ちょっと確認をしたほうがいいと思いますので、改めてそこは伺います。

指標値としては、30名の獲得を目指しているとあります。実際に今課長のほうから答弁いただいたとおり、新聞報道でも報道されるほどの活躍を見せ、また特に弱いとされている資格関係についてさまざまな起業がなされたということが白老町のみならず町民の皆様まで意識にも何か盛り上がりをつくり上げているのかなといった部分、さらにこの間開かれた竹浦のお祭りの中で新しい露店が1つふえたと。町内会の実行委員会たち物すごく喜んでいたので、新しいお店が1つできたと。聞いたら、地域おこし協力隊の方たちが地元の民宿の方たちと話しているうちに盛り上がり、では俺たちでも子供向けの店がないから出してやるかと。出したと。テント1つなのですけれども、本当に町内会長も含めて大喜びしていました。こういった有形無形のまさに地域おこしに協力をいただいている部分に対して本当に改めて敬意を表するとともに、より30人の獲得に向けた施策の具体が必要になってくると考えます。ほかにも産業分野でも、特色ある産業として虎杖浜にはタラコや水産関係、あと社台には野菜づくりと個性的な魅力を持った仕事があります。新たな地場産品の開発にも地域おこし協力隊、既存の方が活躍していますが、新たな業種で地域おこし協力隊を招聘し、もって地域活性化の糸口をつくり出していくべきではないかと考えますが、見解を伺います。

○議長（山本浩平君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） 地域おこし協力隊の隊員数といいますか、もっともっとふやして、もっと地域の活性化につなげるべきではないかという質問のご趣旨かと思えます。

まず、国における協力隊の現状から少しお話しさせていただければと思いますが、この地域おこし協力隊、平成21年度に創設されまして、21年度の国の実績としては89人、団体数につきましては31団体から実はスタートしているところでございます。実際に、今手元にある資料で大変申しわけございませんが、28年度現在、国においては隊員数3,978人と、それから団体数が886団体ということでございます。2017年度については、全国で約5,000人くらいまで来て、いわゆる右肩に上がっている団体数、それから隊員数というような中身でございます。白老町におきましても、当然議員のおっしゃられる趣旨のとおり地域の活性化に資するためにさまざまな取り組みをしていただきたくて、地域おこし協力隊の募集を今まで募っていたところではございますが、なかなかそういう全国的な地域おこし協力隊員のなり手という部分が不足しているのではないのかなという部分と、それからやはり少し景気が国全体として上向いた中で人手不足という部分もあって、なかなか地域おこし協力隊の

なり手もないのではないのかなというような考え方も少し出てくるかなと思いますけれども、引き続き本町の資源の部分であったりですか特色をPRしながら隊員の募集を図っていきたいと考えているところでございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。林業の協力隊がなかなかやっぱり思うように募集できないとか、さまざまな困難が生じている部分については理解できています。引き続き白老町の活力をつくる糸口としての位置づけの中で協力隊の招聘に力を入れていただきたいと望むものです。

それでは、今堆肥を活用した地域資源活用による畜産や農業のことについて1点課長から答弁をいただきましたが、これは総合戦略の中にも堆肥や温泉排熱利活用など地域資源活用による畜産業と畑作の連携、農家誘致と記載されています。これは、さまざまに議員各位からも今回総合戦略には議員提案されていますが、その中の一つとして私もこの堆肥を活用した農家を誘致すべきと訴えてまいりましたが、今や指導的農家でもある先般社台にハウスを展開されている農家の方もいらっしゃいます。白老町の農業環境が一定の充実を見せている中で、今こそそういった畜産や畑作の融合を国の施策も活用しながら目指していく必要があると考えますが、今後の考えについて伺います。

○議長（山本浩平君） 富川農林水産課長。

○農林水産課長（富川英孝君） 先ほどのご答弁と重複いたしますが、堆肥を町内の耕種栽培の農家の方に使っていただくというようなところの有機的な連携というようなところがまず今図られていると。こういったことにつきましては、町内の産業振興にあって本当に新たな芽吹きといいますか、可能性かなとは考えているところであります。今後人口減少ですか、そういった部分が懸念されるころではありますけれども、この北海道、我々白老町でも耕種栽培に新たな可能性が今あるとするならば、そういった中でのなるべく参入しやすい環境づくりですか、そういった部分についてはさまざまな、いろいろと現状入られている方との相談をしながらといいますか、どういったものがやはりこの地域でこの後成長産業化していけるのかということも含めながら、誘致も含めて入りやすい環境づくりということについては我々も思案してまいりたいなと思っております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。それでは、総合戦略の柱の5、きずなを育む豊かな暮らしについて質問させていただきます。

ここでは大きく2点質問いたしますが、こういった象徴空間開設を控えた元気づくりには最大の人口比を占める高齢者の活躍が欠かせないと考えます。こういった地域のきずなづくりの向上という項目については、高齢者への生活支援や障がい者の社会進出等に対す

る取り組みや地域活動の充実を図る取り組みを進めると戦略にも記載されています。こういった高齢者、障がい者の生活支援に対する満足度の重要業績評価指標の現状と今後の向上に向けた考えを伺います。

○議長（山本浩平君） 岩本高齢者介護課長。

○高齢者介護課長（岩本寿彦君） 満足度に関しましては、余りいい評価をいただいているのかなと考えておりますが、こういった部分につきましては昨年8月からスタートいたしました高齢者を対象にした移動支援、訪問型サービスD、こういったものをスタートさせていただきまして、そういう高齢者の方々の、移動困難な方の生活支援といったものをしているところでございます。昨年度8月からスタートいたしまして、8カ月間での実績で申しますと260件の利用がございました。これが多いのかどうかというのはまだ検証し切れませんが、こういったところ今後しっかり高齢者の支援につながるように取り組んでまいりたいと考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 高齢者、この戦略の評価検証、毎年取り組まれていらっしゃる、資料もありますが、この中の記載に、29年度の評価のほうでしたが、この中では高齢者等を初めとする生活支援については介護保険事業会計のほかNPO法人等がその担い手としてさまざまな事業を行っており、今後においてもNPO法人等の役割、存在感は重要となるものと考えたと記載がありました。官民挙げた形での高齢者等の生活の支援といった形は実績の取り組みの一つとして重要になってくるものという考えに私も賛成ですが、こうした福祉有償運送までにかかわっている事業者の現状や課題についてどのように押さえているのか伺いたいと思います。

○議長（山本浩平君） 岩本高齢者介護課長。

○高齢者介護課長（岩本寿彦君） 福祉有償等のまちの移動を支えていただいている団体の現状と課題という部分でございます。こちらのほうにつきましては、よくやっぱり財政的な部分が大きく課題と聞いてございます。それで、現状を申しますと、やはり運営費補助のようなことがあればいいのですけれども、現状といたしましては運営費補助といったものは考えにはちょっと至っておりません。ただ、先ほど訪問型サービスD、それと生活支援という部分ではBというものも昨年8月からスタートしてございます。こういった部分では、この事業を行う事業者に対しては一定限支援ができる形ができたのかなと考えております。ただ、この助成金自体は決して多い額ではございませんので、そういったところは十分こちらのほうも認識してございます。ただ、まちの高齢者の生活を支えていただいている団体への支援というのにつきましては、これからのまちづくり、それと地域包括ケアシステムの構築をしていく上でこれは必要ですし、課題であると認識してございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） それでは、3点目、最後の質問として、がんばる地域コミュニティ応援事業について伺いますが、子供から高齢者までの暮らしの共生（地区協議会からの予算要望など）にかかわって、がんばる地域コミュニティ応援事業に取り組まれておられると承知していますが、今既存で取り組まれた萩野第2地区連合町内会による地域の防災力の向上や社台小学校閉校における地域力の向上や子供たちの健全育成を図るための大人も子供も参加した取り組みや、あと竹浦地域ではさまざまな昔取り組まれた事業を復活させたりしながら地域で取り組んださまざまな取り組みが映像も交えながら報告をされたりなど、この事業を活用した後のグループでの話し合いの中でも事業を活用して久々にあれやるかとか、非常に前向きな参加者からの声が聞かれて、熱く楽しく報告されていて、私は驚きました。さらにこの利用促進を図っていく観点においては、これからこのがんばる地域コミュニティ応援事業をより利用していただくことでこの事業の実が上がってくると考えますが、この応援事業の総括と今後の課題解決等があれば伺います。

○議長（山本浩平君） 工藤企画課長。

○企画課長（工藤智寿君） がんばる地域コミュニティ応援事業につきましては、昨年度より実施させていただいております、今議員がおっしゃったとおり3団体が使っていて、活動させていただいたと。当然報告会の中でも非常に評価も高く、やってよかったという声も聞いて、私もうれしくなったようなところもございますが、実際に今年度に入り予算も多くさせていただいてはございますが、今まだ1団体の活用にしかなってございません。さらにもう一団体今使いたいというお話も相談は受けているところではございますが、その中での課題というのはやはりまだまだ計画をつくるですとか、それからプレゼンをするですとか、それから報告会をやるというのは、3団体が特に一生懸命やっていただいて、ほかの町内会の皆さんが見たときに立派だったということで、少し二の足を踏んでいるようなお話も聞いてございます。ですから、もう少し気軽にと言ったら語弊がありますけれども、もっと簡易にできるような部分であったりですとか、私どもの相談体制をもっともっと充実させていかなければならないなということの課題も捉えてございます。また、その内訳の経費の部分についてもまだまだ見直さなければいけない部分もあるのだろうなという捉えはございますので、そういった点も含めて、これからのあり方も含めてもっともっと改善を加えていく必要があるのだろうなというところを痛感しているところでございます。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） それでは、1項目め最後の質問とさせていただきますので、理事者のほうにお伺いしたいと思うのですが、こういった今の現状を踏まえて、これは私もこの8年間訴えてまいりましたが、地域を自分で守りたいという方たち、まだまだ白老町にたくさんいらっしゃいます。こういった方たちの活躍を促進するためにより少額で簡

易に申請できる利用しやすい補助金の創設をさらに訴えたいと思います。これは、以前にも同じ質問させていただいています。実はある竹浦の町内会長と懇談したときに俺たちが公園や町道の脇、草刈りしたっていいのだと、俺たちがやってやると。俺が声をかけたら元気なやつがいっぱいいるよと。だけれども、せめてお茶代や油代ぐらいは出してほしいのだと言っていました。こういった元気というのは、まちの宝だと思います。ほかにもハウスを共同で建てて、生きがいつくりと同時に笑顔まつりにぜひ出させてほしいのだと言ってくださった方がいました。4人ぐらいいるのだと。ハウスの資材だけ買ってくれればあとは全部自分たちでやって、そしたら笑顔まつりも盛り上がると思うのだと言ってくださった町民もいます。こういった方たちって、今のがんばる地域コミュニティ応援事業はこれはこれで1つ大きな実があると思うのです。ただ、こういったまちを守る取り組みを背中を押してあげられるような少額簡易申請で助成できる、こういった政策をつくり上げていくべきだと思いますが、それに対しての見解を賜りたいと思います。

○議長（山本浩平君） 戸田町長。

○町長（戸田安彦君） がんばる地域コミュニティ応援事業の、どうしてこういう事業をつくったかというのは、今広地議員がおっしゃったとおり町内会や地域の方々の声を聞いて、どういう形で行政として支援ができるかというところが発進でありました。今言ったように、町内会の方々が例えば公共施設等々に壁にペンキを塗るとか草刈りをするというときに何らかの行政支援をいただきたいというのも確かでございます。まだちょっとスタートしたばかりなので、ここは見直しをしながら進めていきたいと思いますので、その見直しは、せっかくなのでつくった制度なので、使ってもらわなければ意味がないので、これは使い勝手がいいように町内会や地域の方々に寄り添った制度をまたさらに構築していきたいなと思っています。ただ、1回目がそれぞれの団体ができ過ぎというか、きちんとやってくれたので、見た周りの方々が非常にいいのだけれども、いろいろハードルも高いというお話もございましたので、ここはきちんと精査をして、使い勝手のいい応援事業にしたいなと思っておりますし、自発的に活動してもらう住民自治の基本的な考えでございますので、この辺はしっかりと私たちも訴えるところは訴えて、汗を流してもらえそうな事業に、取り組みに進んでいきたいと考えております。

○議長（山本浩平君） 岡村副町長。

○副町長（岡村幸男君） 今町長が言われたとおりなのですが、やはり使い勝手のいいいわゆる補助金ということになりますので、ぜひともそういうようなお話というのは担当のほうにこんな使い方はできないだろうかというご相談をどんどん寄せていただくことで使われる助成金の範囲ですとか、もしくはルールみたいなものがどんどん町民の皆様のコミュニティ助成として本当に活用しやすい、そういうものになっていくのかなという部分もございますので、ぜひともそういうようなご相談をしていただきたいなと思います。お茶が出る、出ないの話もそうなのですが、現在それはもう出る形になっているということもあり

ますので、そういうようなことも含めて、気軽に使えるようにご相談をいただければな、このように思います。

○議長（山本浩平君） それでは、ここで暫時休憩をいたします。

休憩 午後 0時02分

---

再開 午後 1時05分

○議長（山本浩平君） それでは、休憩を閉じて会議を再開いたします。

2項目めの質問をお願いいたします。

4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地紀彰です。それでは、2項目めの質問に移ります。

通行に基づき、教育長に対し、白老町らしい教育づくりについて。

1点目、白老町スタンダードやアウトメディアなど、まちとしての重点的な事業の成果と課題を伺います。

2点目、コミュニティ・スクールなど、学校と地域の連携の深化について伺います。

3点目、小中学校児童生徒数の展望と、学校配置についての考えを伺います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

〔教育長 安藤尚志君登壇〕

○教育長（安藤尚志君） 白老町らしい教育づくりについてのご質問であります。

1項目めの白老町スタンダードやアウトメディアなど、町としての重点的な事業の成果と課題についてであります。子供たちの学力向上には、教員個々の指導力を高めることや学校全体で実践をそろえることが重要であることから、本町では白老町スタンダードを策定し、授業改善に取り組んでまいりました。特に3年前から始めた能代市教育委員会との連携事業では、探究型授業に触れることにより、町内の授業スタイルが少しずつ変化してきたことは成果だと考えておりますが、教科、学年、学校によって取り組みにばらつきが見られることが課題と捉えております。アウトメディアについては、子供たちに望ましいメディアとのかかわり方を指導するためアウトメディア123を策定し、子供や保護者向けの講話を開催してまいりました。しかし、現状としては、スマートフォンの所持率が年々高まり学習や生活への影響も出ていることから、アウトメディアの取り組みの推進が重要となっております。

2項目めのコミュニティ・スクールなど学校と地域の連携の深化についてであります。2年前に導入した白老中学校区に続き、昨年白翔中学校区の4校にもそれぞれ学校運営協議会を設置し、町内全ての学校をコミュニティ・スクールに指定しました。白老中学校区においては、小学校と中学校が1校ずつであることから小中の一貫した教育活動を中心に地域

の声を反映した学校経営に取り組んでおります。また、白翔中学校区では小小連携や小中連携に加え、地域との連携を密にした学校経営に取り組んでおります。

3項目めの小中学校児童数の展望と学校配置についてであります。令和元年8月現在、町内の児童数は504名で、今後の展望としては、2年は497名、3年は481名となっております。学校の適正配置については、平成25年に小学校適正配置計画を策定し、社台、白老地区の3小学校を統合して、28年4月に白老小学校を開校いたしました。今後の配置計画については、当初の計画より早いペースで児童数が減少しているため、これからの時代にふさわしい学校づくりに向け、地域のさまざまな事情を総合的に考慮し子供たちにとって望ましい教育環境のあり方を検討してまいります。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。まず、学力の実態調査について伺いますが、これは昨日同僚議員のほうから真摯な議論が交わされているのを踏まえまして、内容重複は避け、課題対応の点についてのみ質問させていただきますが、まず実態については昨日議論がありました。残念なことに一定の全国水準と比べて遜色がない層と、あとやはり下位層に位置づけられる部分についても1つの山があるといった部分を実態としては捉えているといった中で、その課題の対応をどのように考えているかどうかについて、特に学校運営協議会の中でもこの件、報告がなされ、その中で、私は虎杖小学校の学校運営協議会に携わっておりますので、母数が少ない関係で、6人しかいなければ1人当たりで20%近く占めてしまいますので、一概には言えません。ただ、保護者の中から少人数であることのやはり何か影響があるのかどうかということを心配する声もあります。教育委員会としてもそういった学力づくりについては学校の規模にとらわれない学校づくりを目指していると考えていますが、そういった今回の学力実態調査を踏まえたこれからの課題対応についての考えを伺います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 実態として、今ご質問いただいた内容には少人数の部分もございましたけれども、まずは全体的な傾向に対する課題の対応というところで答弁をさせていただきますと思います。

昨日の答弁と同様な答弁になるかもしれませんが、実態として本町の子供たちの学力の状況というのは底辺の子供たちもかなり多いというところは大変大きな課題でありまして、こういった子供たちの学力の底上げがひいては全体的な町内的な学力の向上につながっていくという捉え方もしております。したがって、学校の個々の教師が指導できる人数をきめ細かく少人数にしていきながら子供たちに理解しやすい環境をつくって、やっぱり習得しやすい状況をつくり出すというのは、学校での指導の工夫と、あと教育委員会のさまざまな支援によって課題の解決ができるのかなと思っております。また、底辺の子供

だけにスポットを当てた取り組みではなくて、全体的な取り組みとしてもこれは授業のあり方を教員一人一人が改善していくと。これは、今までも取り組んできたことでありますけれども、今後もさらにこの授業の改善という部分は取り組んでいくことが重要であると考えております。

そしてあと、もう一点、虎杖小学校の学校運営協議会の中で少人数の子供たちと学力の関係ということでお話がございました。直接的に少人数だから学力が低いとか、では規模が大きければ学力が高いのかという、そういうような直線的な関係にはないと理解しております。ただ、今これから求められる学習のあり方の一つとして主体的、対話的な深い学びという学習スタイルがございました。これは、やはりある程度子供たち同士が互いに学び合う関係が必要になりますので、そういたしますと1つの学年が2人、3人という、そういう極小規模であるときにはそういった学習活動がかなりいろんな意味で支障が生じるかなとは考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 広地です。今これからの学力づくりや、さらに学習環境にかかわる学級のいわゆる落ちつきだとか、さまざまな施策の中で落ちついて子供たちが学習に取り組める環境をどのようにつくり上げていくのかといった部分を最後1点こちらの学力実態調査の関係で伺いますが、学習支援員のあり方や、あと特別教育に係っての支援員とさまざまな施策を講じる中で子供たちの担任だけの力に依拠しない、それを支えていくような支援のあり方をさまざまな事業を通して具現化させていっているのかなと感じているのですが、そのあたりの実態や成果、どのような形で押さえているのかどうかについて伺います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 今ご質問いただいたとおりでございます、今学校では組織として子供たちを育てていく、チーム学校という言い方をいたしますけれども、これは担任が直接子供の指導に当たるわけですが、学校全体でさまざまな立場の人間が子供たちの教育に当たっていくという考え方であります。したがって、今ご質問がありましたように学習支援員でありますとか、特別教育にかかわる支援員でありますとか、あくまでも支援員という名称ではありますけれども、この人たちが担っている教育的な役割、機能というのは担任と同じように子供たちを育てる大変有効な機能であると考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。学力を支えていくにはもちろん当然学校現場があります。まず、きのうの議論にもありまして、家庭の中での生活習慣の部分も大きくかかわっている部分があります。実際その中できのうも取り上げているアウトメディアについて、さまざまな話がきのうありましたので、実態について省きまして、町内にこのアウ

トメディア、つまりメディアへの過度の没入等によりいろんな問題が生じているのではないかと懸念されますが、町内の子供たちの実態の中でこのメディアがもたらしている弊害的な部分、どのように整理をされたのかどうかについて伺います。

○議長（山本浩平君） 鈴木学校教育課長。

○学校教育課長（鈴木徳子君） 所有率等は先ほどもお答えさせていただいて、ふえている状況であるということと、アウトメディアの取り組みのところで、やはりきのうも話が出たとおり既修した時間がやはりメディアに触れる時間で消えてしまうというような現状もあります。ただ、不登校等も含めて今見ている中で、やはり今不登校の支援センターのほうでの対応等も見ておりまして昼夜が逆転しているお子さんがいなくはない状況でもあります。メディアのそういう部分についてのかかわりで弊害が出ている部分もあるかと思いますが、支援センター等で個別にかかわっていただきながら少しずつ生活のリズムを取り戻しつつありまして、学校のほうにも行けるようになってきているような現状もありますので、そのあたりについては対応を進めている最中でありまして。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 今学習とメディアとのかかわりについて課長のほうからお話をさせてもらいました。あと、特に中学校で近年非常に危惧しているのは、メディアを使っただけです。つまり子供たちがラインというものを使いながら友達を誹謗中傷する、それによっていじめが発生するというようなことで、このメディアは学習のみならず子供たちの生活にも人間関係を構築していく学校の中でそういうメディアによってなかなか関係が築けなくなったり、あるいはこれがいじめに発展していくとか、これは特に中学校においては非常に大きな課題だと考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。今答弁をいただきまして、学習のみならず生活的な部分、そして下手をすれば人格にも影響を与えかねないような状況も見受けられる中で、私計算してみたのですけれども、現行の学習指導要領にある授業時数なのですけれども、これは4学年以上は現行の、新学習指導要領でまた少しふえますけれども、現行では980時数ですよね。980こまあるはずなんです。これは、45分授業だとすると4万4,100分、つまり、計算してびっくりして、もう一度計算し直したのですけれども、1年間でたった735時間しかいわゆるお勉強の時間というのはいないのです。もちろん給食指導だとか、それもありますけれども、ただ授業の時間というのはたった1年間で735時間、これはどういう意味なのかと思って、考えてみたのですけれども、1日2時間テレビやゲーム、つまりメディアに触れたとしたら、当然365日ありますので、1年間で730時間なのです。つまり1年間学校でお勉強している時間というのは2時間家でテレビや何かを、ゲームをしたりしている時間と比べてほとんど同じなのです。そうすると、2時間以上テレビやゲームをしている子供、私の子供

もそうでしたけれども、そういった子供は1年間の学校の勉強時間よりメディアに触れている時間のほうが長い。だから、これまでもアウトメディア123の取り組みなどで家庭を巻き込んで啓発をしていく、またわかりやすい数字ももとにした望ましい生活の態度だとかを資料頒布などをされている様子は見えています。ただ、私はやっぱりこういった部分や弊害の部分をしっかりに見据えて、改めてメディア媒体への適切な接し方を啓発していく必要があると考えます。具体的な弊害も含め、PTAとも連携し、一層の具体策を講じていくことが必要ではないかと考えますが、いかがですか。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 今メディアのもたらす弊害について家庭との一層の連携が必要であるという内容のご質問でありました。

まさに私どもそのように理解しておりまして、アウトメディア123という望ましいメディアとの接し方、本町で指針をつくっておりますけれども、これを策定するに当たっても保護者の皆さんとも交えながらその内容を吟味してまいりました。ただ、きのうもお話し申し上げましたけれども、これが策定してからもう4年、5年たっております、なかなかこの中身についてももう一度改めて新鮮な気持ちで向き合っていくことが今できない状況でありますので、ぜひ家庭も巻き込みながら、そして私はやっぱり特に中学生は子供たち自身がメディアの光と影の部分をしっかり理解しながら、そして自分で抑制する力を持ちながらかわっていく力をつけないと、ただ単に親がだめだよ、もっと短くしなさいとか言うことだけではきっとだめなのだろうなと思うのです。ですから、子供たちがいかに主体的にみずからのこととしてこのメディアというものを考えていくのか。メディアのよさ、そして危険性、そういったものを具体的に学校での指導であったり、あるいはメディア123にかかわるまた新たな指針の中に反映していきたいと考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。今の子供を巻き込んで、きのうの答弁の中にもありましたようにさまざま子ども議会等もありますので、そういった部分にも含めて今後少し質問を展開させていきたいと思うので。

まず、特色ある教育づくりの一環として私が捉えているのは、子供の夢予算の実現。これは、さまざまな予算要望等々の中で子供たちの要望が現実化していくといった取り組みの中で期待される教育効果もあるのではないかとといった取り組みをなされていますが、この事業の具体的な実施状況や成果、どのように捉えているのかどうかについて伺います。

○議長（山本浩平君） 池田生涯学習課長。

○生涯学習課長（池田 誠君） まず、子供夢予算づくりの30年度の概要と成果についてお伝えしたいと思います。

まず、平成26年の3月に子ども憲章が定められまして、その中で子供に向けては6つの柱

があります。いじめの防止ですとか、思いやりの心ですとか、夢や希望を持つということ、今小学校4校、中学校2校の計6校あるのですけれども、学校に生涯学習課から配分予算として、少額ですけれども、1校当たり5万円、総額で30万円の予算を持って、まずは児童会、生徒会を中心として子供たちが6つの柱の中でどういう項目をチョイスするかという、具体的には各学校で子供たちに向けてアンケートをとったりですとか、課題を共有しながらいろんな取り組みしていただいています。いじめについては周知する、消しゴムにそういうメッセージを書いてみたりですとか、決まりを守るですとか、思いやりの心を持つということでありましたら地域の方と一緒に清掃活動だとか、遊具のペンキ塗りだとかという活動もしていただいております。その中でやっぱり子供たちが自発的に何を取り組んでいくかという考える力がどんどん、どんどん身につけているかなと思います。その実践の発表の場としては、議員もご承知のとおり当初3年間は子ども議会という形で開催させていただきました。子供たち、かなり自分たちの思いを立派に表現していただいていたかなと思います。昨年30年度からは、より地域の人たちにも子供たちの取り組みを理解してもらおうということで、青少年育成大会の場において子ども憲章の実践発表会というのを、子供夢予算づくりの取り組みをその場で成果として発表していただいております。地域の方も、参加した方も相当高い評価をいただいているところでもあります。ただ、今後としましては、せっかく子供たちがそういういい取り組み、中身は今後も進めていきたいと思っておりますけれども、いかにして地域の人にもっと理解していただくかということをもう少し力を入れて取り組んでいきたいと思っております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。子供が自発的、主体的に考え、その要望は実っていくという取り組みは、大人議会もすごくうれしいことです。こういったような自己実現や、あと話し合いでの主体的な課題解決力の醸成は、今後の新学習指導要領にも合致する先駆的な取り組みの一つではないのかなと感じています。より充実させるべきだと考えていますが、予算規模だけでなく何が必要かを考えると。今6つの柱をもとに子供たちに選択をさせ、自主的な議論を促すと、そういった部分がありましたけれども、そういった場の充実、あとそれこそ今アウトメディア、子供を巻き込んでと議論がありました。アウトメディアの適切な接し方を子供とともに考える場の充実だとか、ソフト的な企画の検討などもそういったものをより充実させた形を追求していく中でさらにこの教育効果が期待され得ると思っておりますが、見解を伺います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 今後の子ども憲章の事業の展開についてのご質問でございました。

私どもがこの子ども憲章というものを平成26年に策定いたしました。これは、ややもする

とこういった憲章というのはつくって終わってしまうという、つくることが目的になってしまう、そういうような傾向もございます。教育委員会としては、つくった以上いつもこの憲章を、我々大人もそうなのですから、子供たちにも身近なものとして、つまり自分たちの生活により近い存在としてあってほしいなど、そういう願いを持ちまして、そのためにはやっぱり子供たちに具体的にこの憲章に書かれている中身の具現化に向けて、大人がこうなさいと言うのではなくて、子供が具体的にどういう取り組みができるのかということから子供の目線で、子供の視点から考えてもらう取り組みが必要であろうということでも夢予算も含め、発表の場も議会のほうともいろいろご協力いただきながら取り組んでまいりました。今議員のほうからこの憲章の取り扱いプラスアルファということで子供たちが抱える課題、アウトメディアの問題も今ご提案されました。すぐことしということにはなかなか、現実的にもう動いておりますので、ことしの対応にはちょっと難しいと思っておりますけれども、これもやはり私としては大きな要素だなど捉えております。子供たちが自分たちの生活を見詰めて、よりよい学校生活をつくっていくというような視点で考えたときに子ども憲章プラスアルファというのは大変意味のあることだなど理解しておりますので、すぐここで何年後にやりますというお約束はできませんけれども、大変参考にさせていただきたいなと思っております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。それでは、特色ある白老町らしい教育づくりの中でふるさと学習指導モデルの利活用の実態と成果について伺います。

この特色ある教育活動の充実については、重要業績評価指標の中でも目標値を掲げ取り組まれています。一層の向上をやっぱり待つべき必要があるといった中で、このふるさと学習指導モデルの利活用は大きな鍵を秘めているのではないかと感じていますが、その利用の実態と成果を伺います。

○議長（山本浩平君） 鈴木学校教育課長。

○学校教育課長（鈴木徳子君） ふるさと学習指導モデルについてであります。

総合的な学習の時間ですとかを活用しながら展開されております。それぞれの学年、発達段階に応じた指導モデルが用意されております。そのほかに今は旧アイヌ博物館がありませんので、そちらのほうに行つての体験学習はできておりませんが、今の2年間の中ではそちらの学校のほうに派遣していただいて、体験学習、古式舞踊ですとか、試食の体験ですとか、アイヌ文様の刺しゅうのことですとかを体験しております。今後につきましてもこの部分については来年ウポポイが開設する部分がありますので、今の部分を見直ししながら新たに体験学習とふるさと学習指導モデルは見直していきたいと考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番(広地紀彰君) 4番、広地です。それでは、2点目、コミュニティ・スクールなど学校と地域の連携の深化について質問させていただきます。

これにつきましても同僚議員のほうから種々議論交わされていますので、私のほうからはこのコミュニティ・スクールに対しての評価の位置づけについての質問にとどめたいと思います。実際にかかわる中でコミュニティ・スクールのお便り、直近のやつを拝見させていただきましたけれども、その中では地域学校協働本部の活動によるサポーターの活躍や通学合宿やスマイルスタディー、学びの森、寺子屋虎杖浜など学力向上に直結する取り組みの報告がさまざまに書かれていて、理解と評価の場につながっていると感じています。これは、子供にとってもそうですし、保護者や、あとかかわっている地域の皆様にとっての大きな生きがいにもつながっているのかなと感じますが、地域と学校、相互理解の教育的な価値の中でこのコミュニティ・スクールが果たすべき役割というのはどのように押さえているのかどうかについて。

○議長(山本浩平君) 安藤教育長。

○教育長(安藤尚志君) コミュニティ・スクールでございますけれども、これは今回の学習指導要領の中でも新しい学校の姿として地域とともにある学校づくり、今までは開かれた学校づくりという、そういうようなフレーズでございましたけれども、もう一段踏み込んで地域とともにある学校づくりを進めていくと。その中の具体的な学校のあり方の一つとして、コミュニティ・スクールという学校が出てきたところでございます。これまで学校は地域から支援を受ける存在、さまざまにいろんな、していただくだけの存在でありました。ただ、今この学校と地域との関係においてはまさにパートナーでございますので、学校も地域のために何かをしていく、これを私は地域貢献という言い方を校長会でしますけれども、今学校はもちろん地域の方から何かいろんなサポートも受けることも受けるのですけれども、ただ一方的に受けるだけではなくて、自分たちも地域にいろんな支援をしていく、いろんなかわりを持っていく、そういう意味においてこのコミュニティ・スクールという存在は新しい学校の地域との関係をつくっていく大変大事なツールだなと考えております。

○議長(山本浩平君) 4番、広地紀彰議員。

[4番 広地紀彰君登壇]

○4番(広地紀彰君) 4番、広地です。先般学校運営協議会が開催されまして、その中でOECD国際教員指導環境調査による教師の多忙化の国際比較が学校長から語られました。連絡事務や、あと書類作成等の時間が48カ国平均で2.7時間に対し小学校で5.2時間、倍近く、中学校に至っては5.6時間と倍以上、さらに課外活動についてはOECD平均で1.9時間に対して中学校では部活動があるので、7.5時間と3倍以上になります。また、一方保護者との連絡調整の時間は、OECD平均は1.6時間かけているのに対し、日本では1.2時間しかかけられていない実態。総勤務時間は、平均38時間に対し1.5倍ほどに当たる56時間前後と世界一長いと。少なくとも48カ国の中では一番長い。これは、学校長から示されました。

保護者からは行事など何かを削るときこのような実態を示していくことで理解が広がると思うとコメントがありました。私も教員の一人で10年間いましたので、正直なお話ですが、先生は子供のために頑張って何ぼだと、残業して何ぼだというような感じで正直な話では捉えていました。ただ、実際にこのような姿を数字を通して具体的に語られることによって、家庭訪問の時間を取りやめにして、学校に保護者の方に来ていただくとか、そういった取り組みに一定の反発がありました。ただ、こういった学校を開いていくというこの取り組みがコミュニティ・スクールにより実現し、より教育現場と保護者との理解が広がっている感じがしていますが、この現状の捉えと、あとは今後について考えを伺います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 今議員のほうからいただきましたご質問は、まさに具体の姿の一つであろうかなと思います。今、その前のご質問でもお答えいたしましたけれども、地域とともにある学校でございますので、地域の皆さん方の要望も受けながら学校としてのお願ひも当然発信してまいります。そのときに、やっぱりコミュニティ・スクールの中にある学校運営協議会というこの組織は非常に地域の方、保護者の方が参画していただいている組織でございますので、そういう中で熟議されることがやがていろんな保護者の方へ伝わっていくでしょうし、あるいは地域の中にもこんな話題があったよということで一つ広がっていくだろうなど。これがもしなければダイレクトに学校からこういった働き方改革にかかわるさまざまな情報を提供したときにいろんな受けとめ方が多分できるのだろうなど。そういう意味では、いい意味で学校の理解者であり、翻訳していただける、そういうところが学校運営協議会だなどと思っておりますので、教員の勤務実態のみならずさまざまな学校の課題、そして最終的にはよい教育をしていくということに関しては学校も地域も保護者も皆同じ願ひだと思っておりますので、そういった願ひを達成するためによりこれまで以上にその3者の連携というのは強めていく必要があると考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。ふるさと触れ合いデーについて、通学路の見守り隊の方たちの様子、ふるさと触れ合いデーの中で1年間ありがとうといった様子がコミュニティ・スクールの通信でありまして、ことしの白老小学校の運動会を拝見させていただいたのですが、その中で見守り隊のある方が子供からもらったお守りを毎日身につけていると見せてくれたのです。これは、本当に胸が熱くなりました。やっぱり子供たちの生育に携わっていることが子供にとってだけではなく、地域の皆さんにとっての誇りにもつながっているのかなと思いました。地域塾などでもほかにも見守り隊の方はもちろんのこと、地域塾等々で子供たちの生育に貢献している方はたくさんいらっしゃいます。こういった子供たちのために頑張る皆さんをどこかの機会ではやはり評価をして、さらに活躍を期待していくような、そういった取り組みも必要になってくるのではないかと考え

ますが、見解を伺います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 今議員のほうからそういった学校の教育活動を支えていただいている方の具体的なお話をいただきました。町内的にはまだまだ多くの学校でさまざまな形で子供たち、あるいは学校の教育活動を支えていただいているなど、こう思っております。そのことに対する評価というか、それは学校の教育活動の中でやっぱり返していくことがまず大事だなと思っております。白老小学校では、地域の見守りをしていただいている皆さん方を年度初めに学校にお迎えして、よろしく願いますというような集会を行っています。こういう集会を通して地域の方もまた1年間頑張ろうというような意欲を高められておりますので、やはり教育委員会としても何もしないというわけではございませんけれども、まずは子供たちの具体的な教育活動や子供たちの育ちの姿の中で少しでもかかわってよかった、もっとかかわっていきたい、そういうような気持ちを持っていけるような教育にしていくことが必要だろうと考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） 4番、広地です。それでは、3点目、児童数の展望と学校配置ですが、この少子化の一途の中でより個性的な学校づくりも可能であるといったような、少人数教育の弊害は確かにあります。それは、先ほど教育長からもご答弁をいただいています。ただ、一方で、より個性的な学校づくりということに焦点を当てて質問させていただきたいのですが、この児童減少数の課題と、さらにはこの少人数で教育ができるという利点をどのように整理していくかどうかについて改めて答弁を願います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 一応建前というか、基本的な考え方としては子供たちが多様な学習ができる、そういう環境はやはり望ましいと、それは私は思います。ただ、実態としてそれぞれの地域、今もそうですけれども、学校規模によっていろいろ子供、人数が随分違いますから、そここのところではそれを全てデメリットとも考えておりません。ですから、教育委員会としてはどちらでもいいということではなくて、最終的には子供たちの学習環境の望ましいあり方というところは、これはやっぱり中心にしておかなければいけないなと思っております。ただ、現実的に今、学校の教育活動も大事なのですけれども、地域における学校の位置づけだとか存在というのも大変大事なコミュニティの一つ、中核にありますので、そういうことも勘案しなければ、子供たちの学校ではありますけれども、地域の学校でもあるというところの捉え方はバランスを持ちながら捉えていく必要があるかなと思っております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番(広地紀彰君) 子供の数に対応した学校づくりは当然必要です。ただ、そうやっていくと子供の数は、もう国立社会保障・人口問題研究所の将来推計など開かなくても完全に子供たちは減っていく一方です。ですから、統合しかありません。これは、もちろん今教育委員会も含めてさまざまに時間をかけてじっくりと地域の方、PTAの方とも話をしながら意見をまず拝聴していくといった姿勢をとっていることについては私どもは十分理解できています。ただ、子供の数に依拠した学校づくりというのは、私は学校づくりとは言えないと思うのです。学校が子供の数が減ったらではどんなことができるのだろうと、何がメリットとして捉えられるのだろうということを追求していくことこそ学校づくりだと思うのです。実際に私は今から知見がある教育団体や、あと学校法人等とも連携して、子供の数にとらわれない白老町らしい学校づくりを進めていくべきだと考えているのです。実際民間としても歴史と実績を持つ法人が町内にも所在していますし、すぐ隣のまちには全国のこども園の会の会長を務めている方が運営をされている幼児教育、保育の法人もごぞいます。こういった知見がある方からも連携しながら義務教育の学校づくりへの協力もいただき、白老町らしい学校づくりを進めていくべきではないかと考えますが、見解を伺います。

○議長(山本浩平君) 安藤教育長。

○教育長(安藤尚志君) 議員のおっしゃることも十分理解できます。ただ、私どもも子供たちが、公教育である以上どのような地域にあっても同等の、同質の教育というものはある程度やっぱり考えたいなと思ってはおります。これは、まず基本的な部分として。そして、もちろん今現実的に集合学習でありますとか小小連携でありますとか、こういった取り組みというのは決してそれぞれの学校だけではできないことを補完していく、それもやっぱり私どもの教育行政として必要なことだろうなと思っておりまして、具体的な取り組みをしております。ですから、ここで今学校のあり方についていろいろ議論していく時間は余りありませんけれども、申し上げたいことは先ほどから申し上げておりますが、児童数の減少だけを捉えてすぐ適正配置というような直線的な考え方はしていないというのはまず申し上げたいと思います。もちろんそれも大事なことでありますから、中心には置きますけれども、それ以外にも地域における学校の位置づけや存在、そしてあと保護者の願い、地域の願い、そういったものも十分我々は踏まえながら学校のあり方というものをやっぱり考えていかなければならないかなとは理解しております。

○議長(山本浩平君) 4番、広地紀彰議員。

[4番 広地紀彰君登壇]

○4番(広地紀彰君) 4番、広地です。今回の一般質問の前に答弁調整会議前のヒアリングを受けた際に教育委員会のある専門員の方からこのような質問をヒアリングの最後に受けました。議員は、この質問を通して何を訴えるお考えですかと。この質問で私は娘のことを思い出しました。くだらない話なのです。先月列車の図鑑を買ったときに付録のDVDがついていまして、それを車で見せていたときにスーパー北斗が紹介されまして、そのスーパ

一北斗の画像とともにこうナレーションが入ったのです。この列車は、有名な洞爺や登別市を走っていますと。娘はこう言いました。白老町は入っていないのだと。ただこれだけのことです。しかし、私は気づきました。娘は、自分が生まれ育った白老町を自分の誇りにしているのだと。白老町と入っていないと残念だったのです。私は、よそで生まれ育ちました。でも、ここで生まれて育った娘は、ふるさと白老町を愛して、入っていなかったら残念だと思う。子供たちは、白老町が入っていてほしかったのです。教育の目的は人格の完成です。その人格の中にふるさと白老町がここで生まれ育った私の娘には刻まれていました。何もない最悪のまちで生まれ育ってつまらなかったと、これではだめです。私たち大人が素敵なまち白老町を教え、伝えていかなければいけないと考えます。その力は、教育にまつべきだと思います。日本のカーリング史上初のオリンピックのメダルをもたらしたカーリング女子日本代表、吉田知那美さんは、北見市常呂町で凱旋報告会で語った言葉、教育長はご存じですよね。このように言ったはずです。常呂町、このまち何もないよね。小さいころはここにいたら夢はかなわないのではないかと思っていました。でも、今はこのまちでなければ夢はかなわなかったと思います。これまで質問の中で子供たちに地域の誇り、育成のために個性的な教育活動への評価と課題解決について具体的にも伺ってまいりました。改めて教育長に特色ある教育活動展開による白老町の子供たちへの誇りの醸成についての答弁を賜りたいと思います。

○議長（山本浩平君） 安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君） 今議員のほうからいただきました質問は、白老町の教育に携わる者一人一人がしっかり持たなければ、心に秘めなければいけないことだと思っております。私どもは、お子さんをお預かりして、義務教育という9年間の中でかかわりを持たせていただいておりますけれども、一人一人の子供たちがこの地で受けた教育が子供たちの夢を実現していく、そういう力になっていく、そのための一つが学力であったり、あるいは心の豊かさであったり、そういった本当に人間としての豊かさをこの地でしっかり育てていくことが白老町のこの教育に携わる者の大きな使命だと考えております。

○議長（山本浩平君） 4番、広地紀彰議員。

〔4番 広地紀彰君登壇〕

○4番（広地紀彰君） それでは、最後の質問ですが、もともと教育委員も務めておられて、教育にも大変熱心に取り組まれてきた町長に対して質問させていただきます。

同趣旨の質問として、子供たちの人格の完成のためにふるさと白老町に対しての誇りが必要だと考えますが、白老町長としての見解と考えを伺いたいと思います。

○議長（山本浩平君） 戸田町長。

○町長（戸田彦彦君） 今るる教育長を初め広地議員といろいろなやりとりがございました。それをあわせて、ふるさとに誇りを持ってもらう、愛着を持ってもらうということはそれまでの過程が非常に大切だと思っております。今社会が本当に変動する中、今世の中、地

域社会が本当に希薄になってきて、人間関係も希薄になってきていると認識をしております。そこで、家族や地域とのきずなの大切さを学んだり、自分で考えて未来を切り開く、そんな子供たちの人材の育成が必要だと考えております。先ほどから広地議員が言っている白老町らしい教育、私もそのとおりだと思いますので、白老町には白老町らしい自然や文化や歴史があります。その中で多くのものを体験したり経験したりすることで白老町に対するふるさとの愛着が芽生え、それがふるさとの誇りに変わっていくと思いますので、町長部局と教育委員会と連携をしながら一人でもふるさとの愛着を、誇りを持ってもらう子供たちを育てていきたいと考えております。

○議長（山本浩平君） 以上で4番、広地紀彰議員の一般質問を終了いたします。